様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 3 1 日現在

機関番号：34416
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008　～　2010
課題番号：20520448
研究課題名（和文）
主観性と状況認知に基づくメタファー理論の探求―認知言語学的研究―
研究課題名（英文）
Pursuit of a Metaphor Theory Based on Subjectivity and Situated Cognition: A Cognitive Linguistic Research
研究代表者　鍋島　弘治朗（NABESHIMA KOJIRO）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：90340645

研究成果の概要（和文）：
本研究では、主に認知言語学の立場から、主観性の概念を明らかにし、これとメタファー理論の関連性を検討した。3 年間を通じて、3 つのシンポジウム（1 つは震災のため企画のみで中止）および 1 つのワークショップを主催し、さらに 1 つのシンポジウムおよび 2 つの会議で招待講演を行い本内容を発信した。さらに、2008 年度のシンポジウムの講演者を中心に 10 余名が寄稿し人工知能学会学会誌 2011 年 7 月号が「主観性」特集として発行される。また、近著『日本語のメタファー』でのメタファー研究との関連や文献も含めて本研究結果を総括している。認知言語学の主観性は、発達心理学の自己中心参照枠、言語人類学の相対的指示枠、Recanati の枠組みの implicit *de se* と等価であり、今日、認知科学でひとつの潮流を形成しつつある身体性研究と概念のインタフェースとなるべき空間認知形式であることがわかった。

研究成果の概要（英文）：
This research clarifies the concept of subjectivity and its relationship to Metaphor theory from Cognitive Linguistic point of view. Through 3 years, I sponsored three symposia (one was scheduled but cancelled due to East Japan Earthquake), one workshop, I was also invited by one symposium, one conference and one university and made presentation on this topic. Furthermore, the July issue of the Journal of Japanese Artificial Intelligence Society features “subjectivity” with 10 or more people mainly from participants of the March 2009 symposium. My book, which was issued on May 13th *Japanese Metaphors* demonstrates the relationship between metaphor and subjectivity and contains comprehensive reference. Cognitive Linguistic idea of subjectivity is equivalent to egocentric frame of reference in the developmental psychology, the relative frame of reference in the linguistic anthropology and implicit *de se* in Recanati (2007)’s framework, and it works well together with the embodiment research which is now forming a trend in cognitive science today.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：主観性　メタファー　Ｓモード　主観的把握　参照枠　間主観性

１．研究開始当初の背景

Langacker (1990)、Recanati (2007)をはじめ、諸分野で非常に近しい概念が提唱されており、これを整理するともに、身体性を基盤とするメタファー理論がこの主観性の概念によって飛躍的に整理されるのではないかという目論見がこの研究の背景であった。

２．研究の目的

（１）　認知言語学に於ける主観性の概念と形式意味論における主観性の概念の類似点、相違点を検討し、これを記述する。

（２）　認知メタファー理論における経験基盤の概念、身体性の概念を上述の主観性との関連で再定義し、明示化するとともに、関連する研究文献書誌を作成する。

３．研究の方法

文献の検討、研究会、ワークショップを通じて行う。

４．研究成果

2008年度は、「研究実施計画」に記された通り、Langacker (1990)における主観性の概念と、Recanati (2007)に於ける主観性の概念の類似と相違を検討するため、１つのワークショップと１つのシンポジウムを企画した。ひとつは認知言語学会における主観性とメタファーのワークショップであり、今ひとつは、2月27日、28日に行われた主観性に関するシンポジウムである。

（１）認知言語学会ワークショップ「主観性とメタファー」

このワークショップでは、ラネカー研究者の聖トマス大学深田智氏と幼児の認知発達研究者である広島大学杉村伸一郎氏を招いた。その結果、ラネカーの主観性の概念は、Langacker (1990)のバージョンとその後のバージョンと分けられることがわかった。また、幼児の空間発達は、自己中心参照枠（主観的把握）から、環境中心参照枠（客観的把握）へ直線的に進むのではなく、モノを中心とした空間把握などを経ながら緩やかに発達することがわかった。

（２）　主観性とパースペクティヴ　シンポジウム

このシンポジウムでは、愛知大学片岡邦氏、神戸市外国語大学本田啓氏、慶応大学井上京子氏、立教大学小山亘氏、昭和女子大学池上嘉彦氏、奈良女子大学浜田寿美男氏を迎え、主観性を巡る諸概念のすり合わせを行った。また、参加者に東北大学の上原聡氏、東京電機大学の月本洋氏を得て盛大に行われた。その結果、自己中心参照枠、主観的把握、主観性の概念は大枠合致を見ており、オリゴはダイクティック・センターと考えられることがわかった。

2009 年度には、交付申請書に記入した通り、主に、以下の２点を中心に研究を進めた。1. 本研究で定義された主観性の概念を様々な側面から応用的に検証する。2. 本研究の主観性が、認知メタファー理論に関する身体性、　経験基盤の概念とどのように関連するのか　検討する。

これらを達成するために、11 月の日本英語学会においてシンポジウムを開催し、メタファーと主観性をテーマに、コンピュータ科学

研究／脳科学の分野から、月本洋氏、言語学の分野から篠原和子氏、心理学の分野から楠見孝氏を招いて、谷口一美氏の司会で主観性とメタファーについてご発表いただいた。この結果、篠原氏の研究からは、移動のメタファーにも主観的認知が重要な役割を果たすことがわかった。月本氏の発表は、脳の構造と言語処理の違いが、自他区分の違い（主観性の度合いの違い）を生むという画期的な提案であった。楠見氏は痛みをテーマに強度の痛みの方がリテラルな表現となりやすいという興味深いデータを提示していただいた。本研究における主観性との整合性を検討する必要がある点で大変貴重なシンポジウムであった。

さらに、心理学的研究を中心にメタファー研究の論文を収拾し、文献書誌を作成した。このほか、フランス語学会シンポジウムのシンポジストおよび国立台湾大学の講演者として招待を受け、講演の中で主観性とメタファーの関連等に関して研究の現状を報告した。

2010 年度には、交付申請書で述べた通り、全体の総括をするシンポジウムが企画されていた。このシンポジウムは、平成 23 年 3 月 25 日、26 日に関西大学で、人工知能学会ことば工学研究会の一部として企画された。その骨子は、ラネカーの主観性について包括的な発表と議論（司会：金沢大学　中村芳久教授）、認知言語学および関連分野における主観性の主要な 3 つの理論の比較と差異の検討（池上嘉彦教授、中村芳久教授、広瀬幸生教授、司会：東北大学上原聡教授）、関連分野からの主観性と間主観性に関する発表（本多啓、片岡邦好、名古屋大学　文学部哲学研究科 宮原勇）、招待講演（発達と間主観性の観点から松井智子先生、脳科学の観点から杉浦元亮先生、全体討議（司会：鍋島弘治朗）からなる包括的なものであった。残念なことに、東北太平洋沖大地震の影響で、一部の参加が困難になり、共同主催者の中村芳久教授、上原聡教授と十分に検討し、中止という苦渋の選択を取ることになった。参加予定者に地域や家庭でより急務となる役割が生じている以上、必然的な措置であったと考える。しかし、事前準備段階で、登壇予定者同士の議論が行われ、さらに、ことば工学研究会の枠で本来発表予定であった内容の一部は、ことば工学研究会の枠で発表され、実りある議論が展開された。加えて、平成 20 年度に行われたシンポジウムの内容を人工知能学会誌において特集として出版することになり、平成 23 年 7 月号として、10 名余りによる人工知能、発達、言語、社会言語学の観点からの論考が登場する予定である。国際面に目を向けると、鍋島がニュージーランドのダニーデンで 1 月に行われた認知と第二言語習得シンポジウムに招待を受け、主観性とメタファーに関して John Taylor や Dirk Geeraerts といった著名な学者のいる聴衆に対して、本研究を国際的に発信した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5 件）

① Nabeshima, KJ. Three mountains and Half Dome: Philosophical investigations on views and perspectives『英文学論集』2011. 印刷中

② 鍋島弘治朗 主観性とメタファー―S モード認知を中心に―『人工知能学会誌』2011. 印刷中.

③ 阿部明典、片岡邦好、鍋島弘治朗　特集：主観性とパースペクティブ にあたって『人工知能学会誌』2011.印刷中.

④ 鍋島弘治朗、深田智、杉村伸一郎. 「ワークショップ　主観性―認知発達とメタファー研究との関連から―」 『認知言語学会

論文集』第9巻. 2009. 591-603.
⑤ 鍋島弘治朗　主観的把握（Sモード）の理論、証拠および特性―身体性メタファー理論の観点から―『人工知能学会ことば工学研究会資料』2009.　SIG-LSE-A803:1-10

〔学会発表〕（計　7件）
① Nabeshima, KJ Subjectivity and metaphor: About S-mode cognition and its extensions via REALITY IS HERE metaphor and Event Structure metaphor at Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition: Towards an Integration of Language, Culture and Cognition 、University of Otago, Dunedin, New Zealand 21-23 January 2011
②鍋島弘治朗　「身体性パラダイムの融合と拡大」　認知言語学セミナー2010年度認知言語学セミナー「認知言語学入門：基礎から応用・実践へ」立教大学2010年9月10日
③ Nabeshima, Kojiro Contextualism and Cognitive Linguistics: Similarity and Dissimilarity between. Recanati's theory and Cognitive Linguistics. 国立台湾大学語言研究所 第215次学術演講2009年11 月2日
④ Nabeshima, Kojiro From Aristotle to Grady: The Concepts and Development of Cognitive Metaphor Theory. 国立台湾大学語言研究所 第214次学術演講2009年10 月30 日
⑤ 鍋島弘治朗　Recanati の理論と認知言語学
フランス語学会シンポジウム「ことばに主体はどのようにあらわれるか：フランス語と認知言語学」中央大学理工学部後楽園キャンパス2009年5 月23 日
⑥ 鍋島弘治朗、深田智、杉村伸一郎. 「ワークショップ　主観性―認知発達とメタファー研究との関連から―」 第 9 回認知言語学会全国大会　2008年9月13日
⑦ 鍋島弘治朗、主観的把握(Sモード)の理論、証拠および特性 ―身体性メタファー理論の観点から―人工知能学会ことば工学研究会2009年2月27日

〔図書〕（計　1件）
① 鍋島弘治朗『日本語のメタファー』くろしお出版 2011.5　374頁

〔その他〕
ホームページ等
http://subjectivity2.blogspot.com/　（主観性シンポジウム）
http://subjective.exblog.jp/　（主観性とパースペクティヴ）

６．研究組織
(1)研究代表者
鍋島弘治朗（NABESHIMA KOJIRO）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：90340645